

□海外文献紹介□

潰瘍性大腸炎患者家族における特
発性炎症性腸疾患の頻度

Prevalence of inflammatory
bowel disease among relatives with
ulcerative colitis: *Monsén U, et al*
(Scand J Gastroent 22: 214-218,
1987)

潰瘍性大腸炎(UC)患者家族から
は特発性炎症性腸疾患(IBD)が高率
に発症することが知られているが、
バイアスのない研究は少ない。1955
年から79年までの25年間にストッ
クホルムで診断された1,274例の
UCについて家族内発生の頻度を全
例個人面接で調査し、家族内発症の
IBD全例について病歴で確認でき
た。結局対象としたUCは963例

で、その中から76例の家族内発症
のIBDが確認された。

UCの家族内発症は65例(6.7%)、
Crohn病(CD)は11例(1.1%)で
あった。UC 65例のうち、家族内
で1例のみ発症52例(80%)、2例
発症は10例であった。また家族内
発症UC例はそうでないものより
有意差で若年にて発症していた
(25.5歳: 33.4歳)。一親等にUC例
があったものは55例(85%)で、父
親9%、母親15%、兄弟16%、姉
妹18%、息子9%、娘26%にみら
れた。一親等のUC発症は一般で
の発症率の15倍の高頻度であった。
二親等の家族内での発症は、12例
が祖父母とおじおばで、いとこが
15例であった。また一卵性双生児

の3組では、UCの発症はなかった。
家族内発症のUCの60%は全結腸
型で、一般に比して有意に多かった。

CDは11例あり、9例が一親等で、
同様に罹患率は一般での発症率の
3.5倍の頻度であった。

調査が完全に行われたか否か問題
にはなるが、これより頻度が低くな
ることはない。これまでの報告と比
べると、同胞内では兄弟姉妹が最も
多いこと、女性に多い傾向であるこ
と、発症年齢が有意に若年であるこ
となどの点で同じ結果であった。
UC、CDともに一親等に多いこと
は、何らかの遺伝形式がある可能性
を示唆する。

(関東通信病院消化器内科

桜井幸弘 抄)